



01 はじめに

佐久島は、愛知県西尾市沖の三河湾に位置する離島であり、島全域が三河湾国定公園に含まれる自然公園区域である。海岸線、雑木林、農地、集落が連続する島の景観は、人の生活と自然環境が密接に関係する空間構造を形成している。近年は、島内に点在するアート作品群により「アートの島」として認知され、観光地としての側面を強めている。しかし、自然公園区域という特性上、建築行為には景観保全や環境負荷低減への配慮が求められ、島内における観光施設の整備は容易ではない。そのため、佐久島における建築的介入には、観光振興と自然環境の保全を同時に成立させる空間のあり方が求められる。



05 プレ調査から把握した状況

島内施設の分布、既存宿泊施設の立地、観光動線、島民への聞き取りを通して、佐久島の滞在環境を把握した。その結果、観光行動は港周辺とアート作品周辺に集中しており、島内で長時間滞在するための拠点となる空間が不足していることが明らかとなった。また、既存の宿泊施設は集落内に立地するものが多く、自然環境や島の風景を主体的に体験する空間としては十分に機能していない。観光と島の環境を媒介する建築的装置が欠如していることが、滞在型観光の成立を妨げる要因となっている。



Question

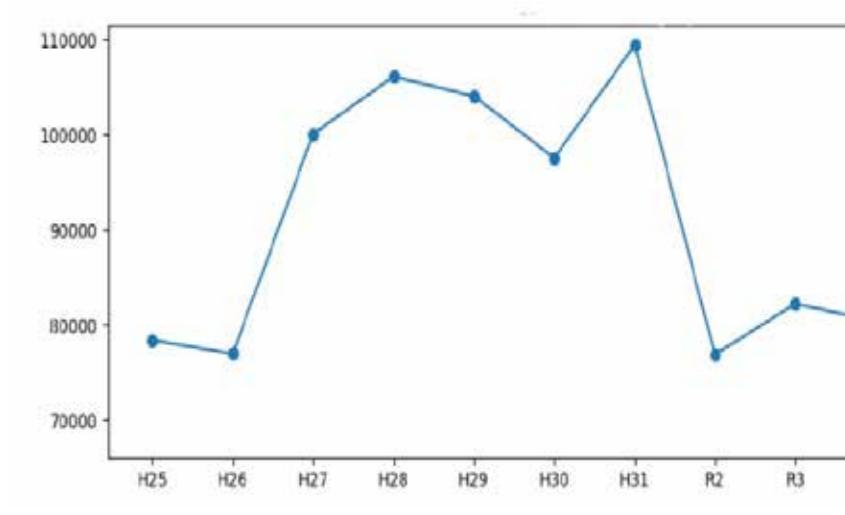


Answer

02 佐久島の観光特性

佐久島の観光は、港を起点とした徒歩での散策を中心であり、アート作品や自然景観を巡る回遊型の行動が特徴である。観光体験は屋外空間に大きく依存しており、建物の中で完結する観光施設は少ない。

また、夜に営業する飲食店がほとんどないため、観光行動は昼間に集中し、短時間の滞在にとどまりやすい。一方で、観光客数は近年減少傾向にあり、量から質への転換が求められている。島では移動そのものが体験となり、非日常を過ごしやすい。こうした特性はグランピングと相性がよく、滞在時間を延ばすことで、島の魅力をより深く味わう観光が可能となる。



宿泊形態	滞在性	非日常性	環境への介入
ホテル	△	△	大
旅館	○	△	中
キャンプ	△	○	小
グランピング	○	○	小

宿泊形態別の特性比較表

10 滞在風景のイメージ

サウナ



こどもの遊び場



島景に宿 佐久島



03 対象敷地

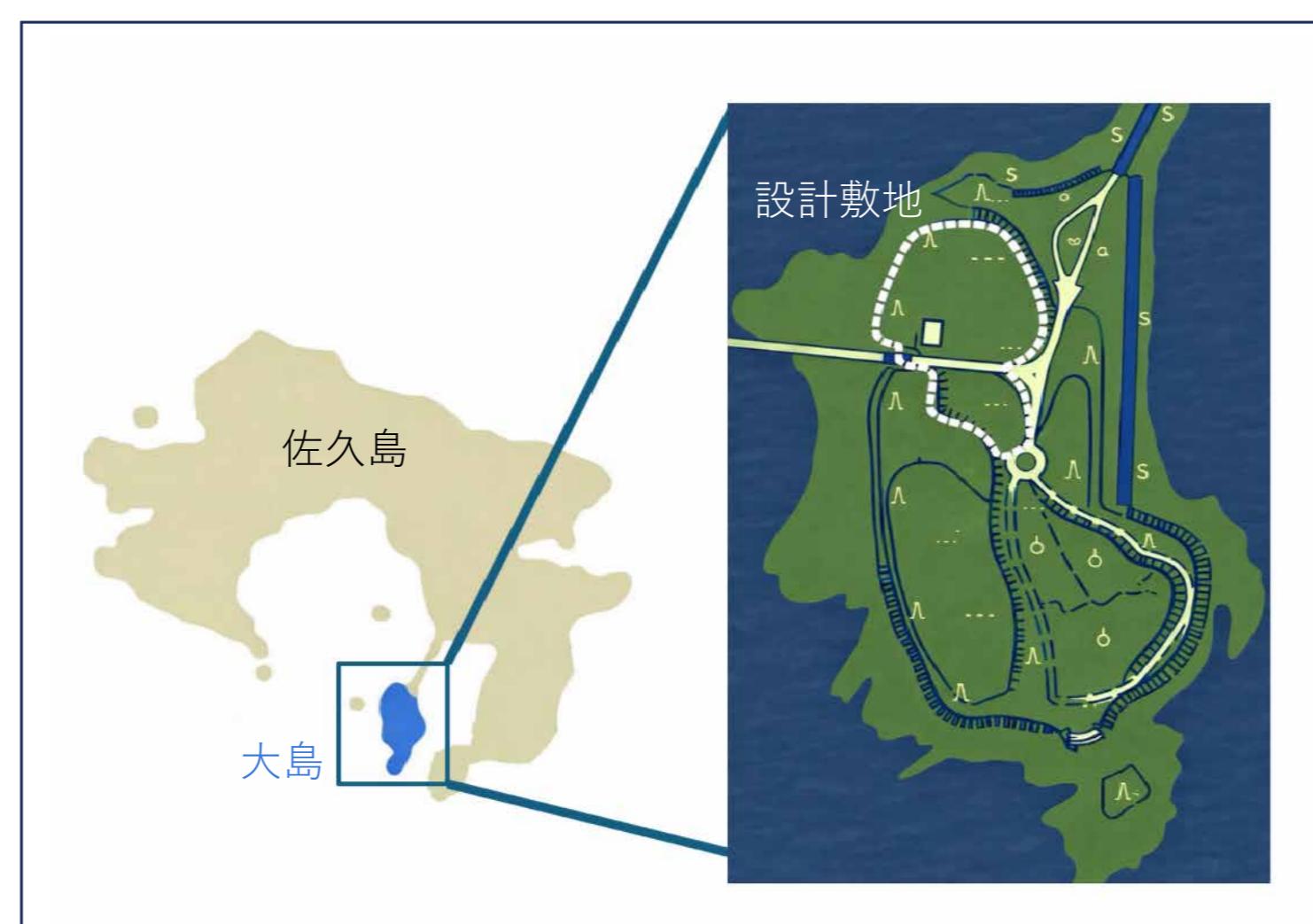
佐久島の南部に位置する「大島」地区である。集落から一定の距離を保ちつつ、海と樹林に囲まれた自然環境を有するエリアであり、島内でも比較的静かな環境が保たれている。この大島を対象として、島の景観資源を活かした滞在型施設のあり方を検討する。

立地特性から島の暮らしや既存の観光環境と一定の距離を保ちながら、新たな滞在の在り方を検討する場として適している

04 島特有の環境条件

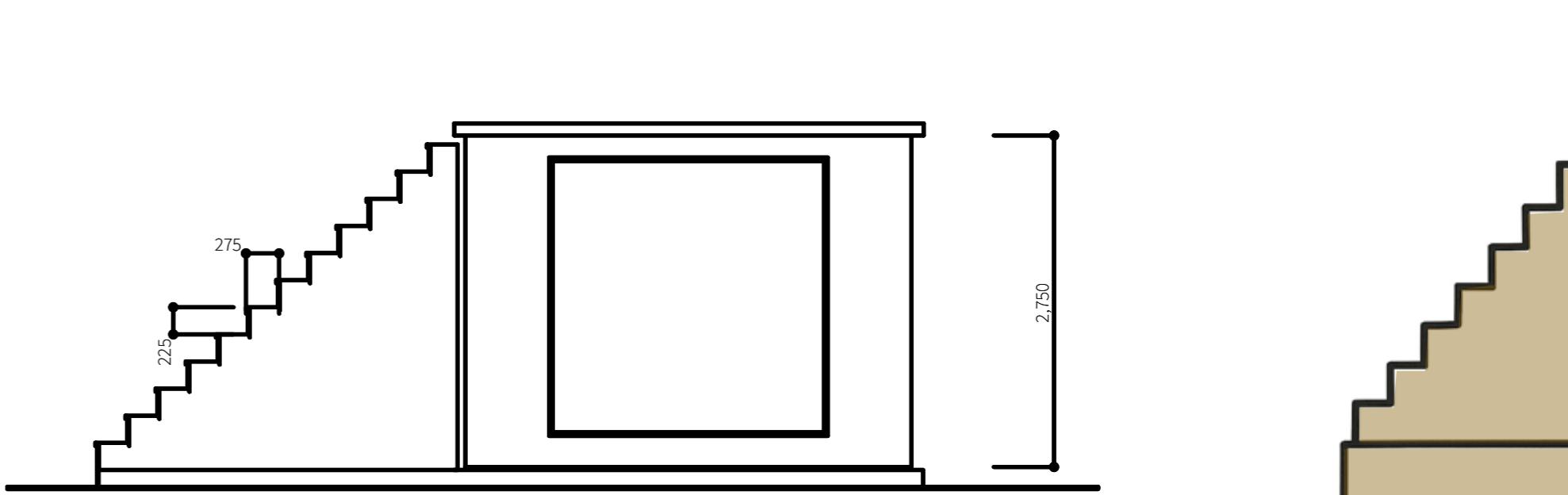
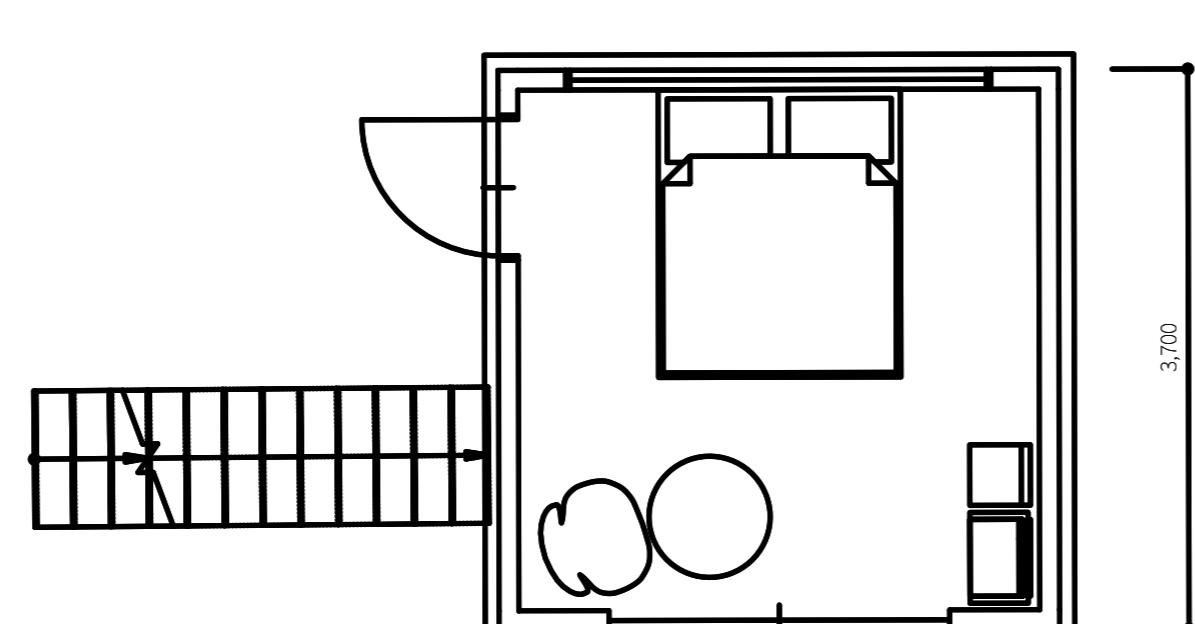
佐久島は本土と海上交通によってのみ接続される離島であり、人や物資の移動が制限される空間である。島内には医療機関が存在せず、夜間の緊急搬送も困難であるため、観光客の安全管理は島民や消防団に依存している。また、廃棄物処理や資源供給は島外に頼る部分が大きく、観光客の増加は環境負荷として直接島内に影響を及ぼす。

このように佐久島は、観光地であると同時に生活の場であり、自然保全区域としての性格を併せ持つ地域であり、観光のあり方には、利便性や集客性だけでなく、島の暮らしや環境への配慮が強く求められる。



14 島景に宿るキャビン計画

キャビンは、佐久島のアート作品に見られる抽象的な形態と、自然との関係性を建築化した。シンプルなボリュームを森の中に点在させ、曲線的な動線で発見する佐久島の体験を再構成。主張しすぎず、風景の一部として存在する。島景に宿る自然とアートを身体的に体験する滞在空間の創出を目指した。



る

の景観資源を活かしたエコグランピング

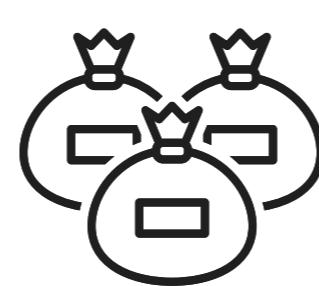
井澤研究室 設計 役田友理

医療機関なし 夜間の救急対応が困難

▶ 設計の対処

夜間の島内移動を避け、宿泊者の行動範囲を敷地内で完結させる計画

管理棟に管理・緊急対応機能を集約し、有事に対応できる拠点を明確化



ゴミ処理は島外依存 環境負荷が島内に蓄積しやすい

▶ 設計の対処

敷地内にエコストーションを設け、分別・減容・循環の仕組みを可視化

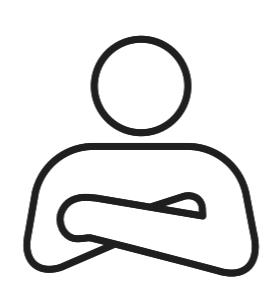
観光によって生じる廃棄物を環境負荷として認識させる空間構成

医療機関なし 夜間の救急対応が困難

▶ 設計の対処

管理棟に食事機能を内包し、夜間も島内で完結して過ごせる環境をつくる

日帰り観光では得られない「夜の島」を体験できる滞在型観光を可能とする



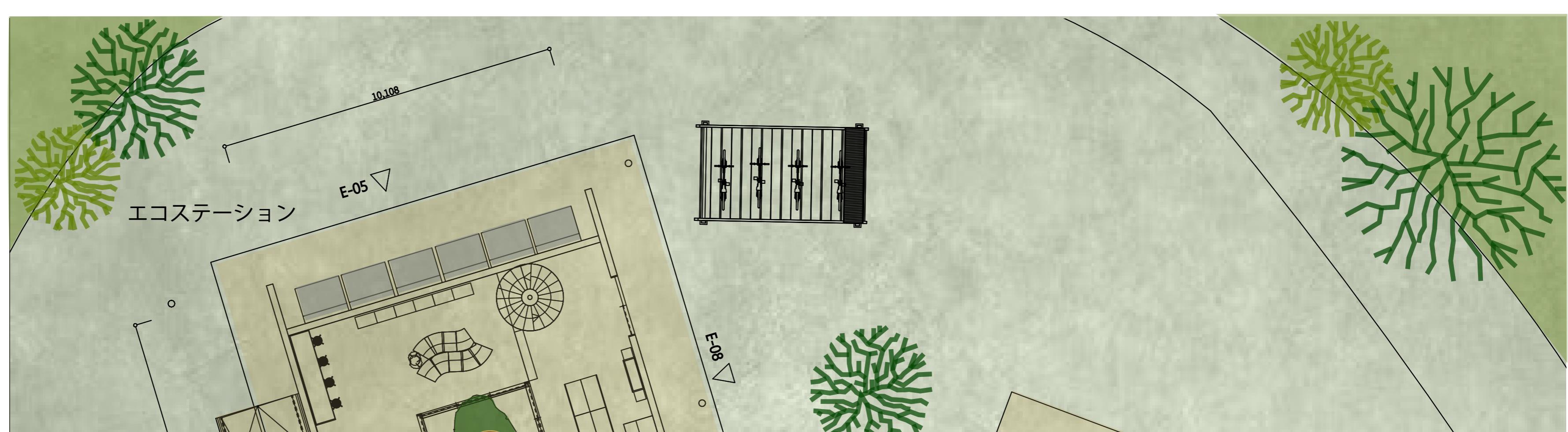
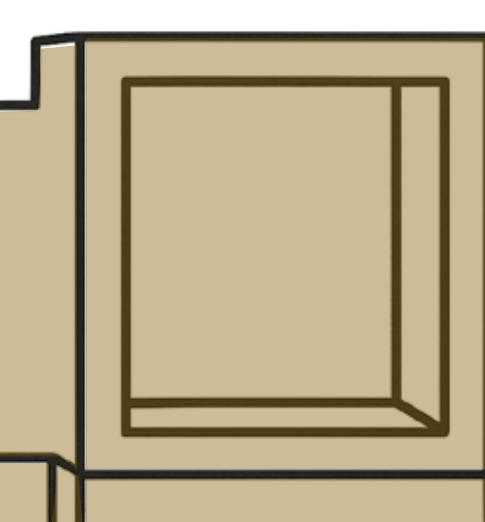
観光対応は島民が担う 人的負担が集中する

▶ 設計の対処

管理棟を運営の中核とし、受付・管理・緊急対応機能を集約

常駐管理による対応を可能とし、島民への負担集中を避ける構成

でつなぐことで、歩きながら



質問内容
①佐久島にグランピング施設をつくることについてどう思うか
②管理面で不安な点はあるか
③医療・緊急対応の状況はどうか
④観光客のトラブルはあるか
⑤食事はどう計画するのがよいか
⑥地産地消の食材調達は可能か
⑦過去にテント泊イベントなどはあったか
⑧グランピング客に島を回ってもらうことについて
⑨既存宿泊施設と競合しないか
⑩島のルール（ゴミ処理など）はどうなっているか
⑪外部の人が事業を始めることについて
⑫島の自然や文化を守るために気をつける点

回答

島の知名度向上や集客につながるため、基本的に良いことだと思う。ただし、安全管理や許可関係などがきちんと整っていることが前提。無人運営や鍵だけ渡す形式は不安。何かあったときに対応できる人が常駐していることが重要。

島内に医療機関はなく、夜間は救急船も出ない。緊急時は島内で対応するしかなく、消防団（島民）の負担になる。

救急搬送が多く、島民が仕事を休んで対応する場合もあり負担になっている。

外食を前提にすることは難しく、施設内で食事を完結させる方が現実的。

魚屋や八百屋が島にいため安定調達は難しい。多くの宿は本土で仕入れるか、自家菜園で対応している。

星を見るイベントなど短期的なテント利用はあった。少人数・短期間のため大きな問題はなかった。

施設だけで完結せず、アートや集落など島内を回る仕組みがある方がよい。

新しい客層が増えるなら問題ない。むしろ良いことだと思う。

資源ごみ回収は月1回。燃えるゴミは焼却している場合も多く、観光施設は処理費用の負担が必要。

反対は少ないが、無人施設や管理者不在の運営には不安がある。

立入禁止区域に入る観光客がいるのが問題。ルールを伝える仕組みが必要。



06 課題の整理

1. 観光体験が散策行動に依存し、滞在行為として構造化されていない

2. 自然環境と観光施設を接続する空間が不足している

3. 観光による環境負荷や管理体制が空間的に可視化されていない

4. 観光と島の生活領域が明確に分離されていない

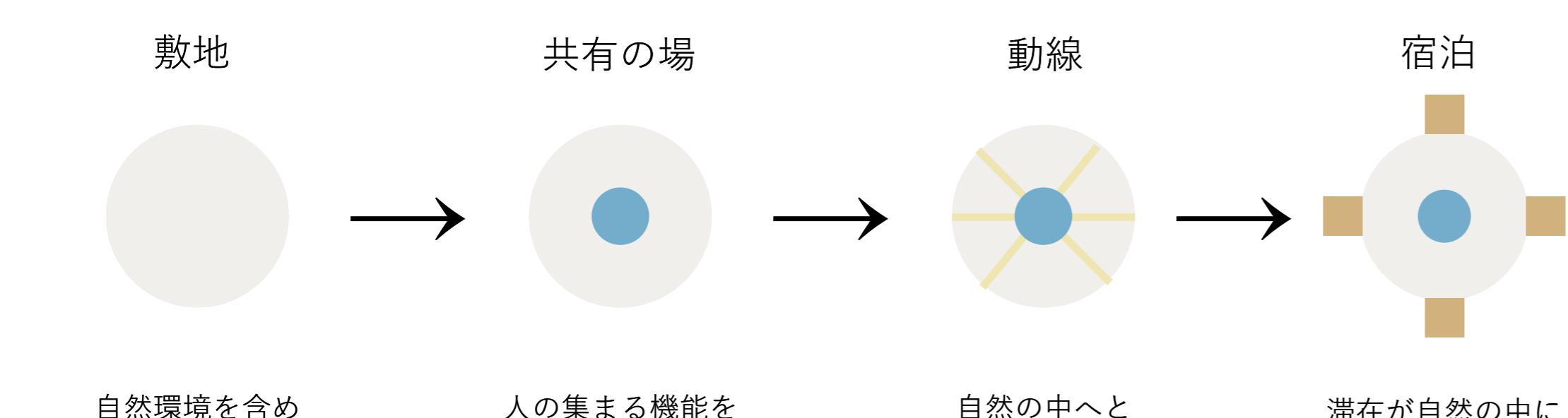
観光が島の風景や環境構造と十分に結びついていないことに起因

07 研究の目的

本研究では、島の景観資源を活用した宿泊・飲食・交流機能を分散的に配置し、「滞在行為」そのものが島の自然環境および生活環境と関係づけられる空間構成を構築することを試みる。さらに、資源循環の仕組みを建築に組み込み、観光客が消費主体としてのみ存在するのではなく、島の環境維持に関する主体へと位置づけを転換する滞在モデルを提示することで、佐久島における持続的観光の一類型を示すことを目的とする。

08 設計方針

建築を一体化せず、地形や樹木の間に分散配置することで、風景の中に建築を溶け込ませる構成とした。中央の共有機能から放射状に宿泊棟へと広がる構造により、人の動きそのものを自然体験へと変換している。



9 循環する島のエコグランピング

いらないものが環境負荷として残りやすい離島だからこそ「捨てる」ではなく
「循環させる」仕組みをつくる

エコに特化したグランピング活動
→ 観光客と島民が共に分別や再利用に関わり、いらなくなつたものが次の価値へと変わっていく過程を体験する場となる



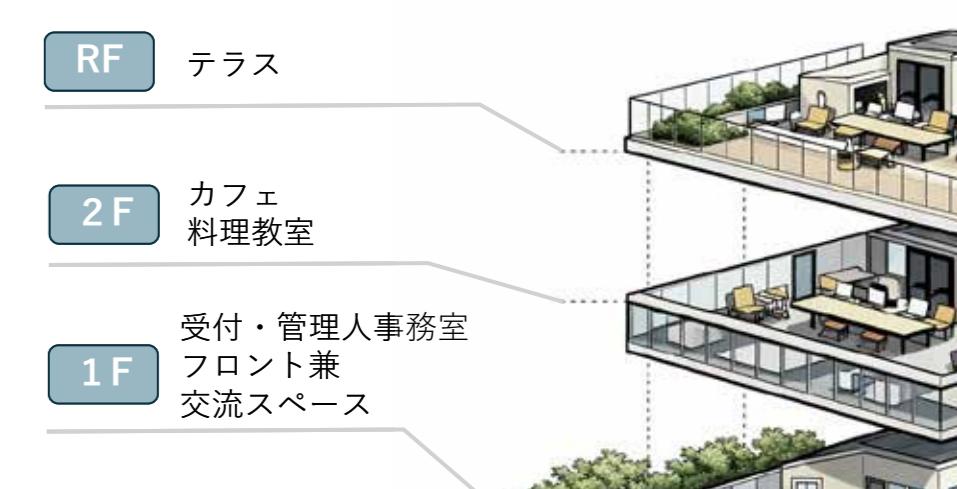
11 計画ゾーニング図

「グランピングエリア」「管理棟」「エコステーション・菜園」「サウナエリア」の4つのゾーンによる。各ゾーンは役割に応じて配置され、歩行動線によって緩やかに接続されることで、敷地全体を用できる構成としている。

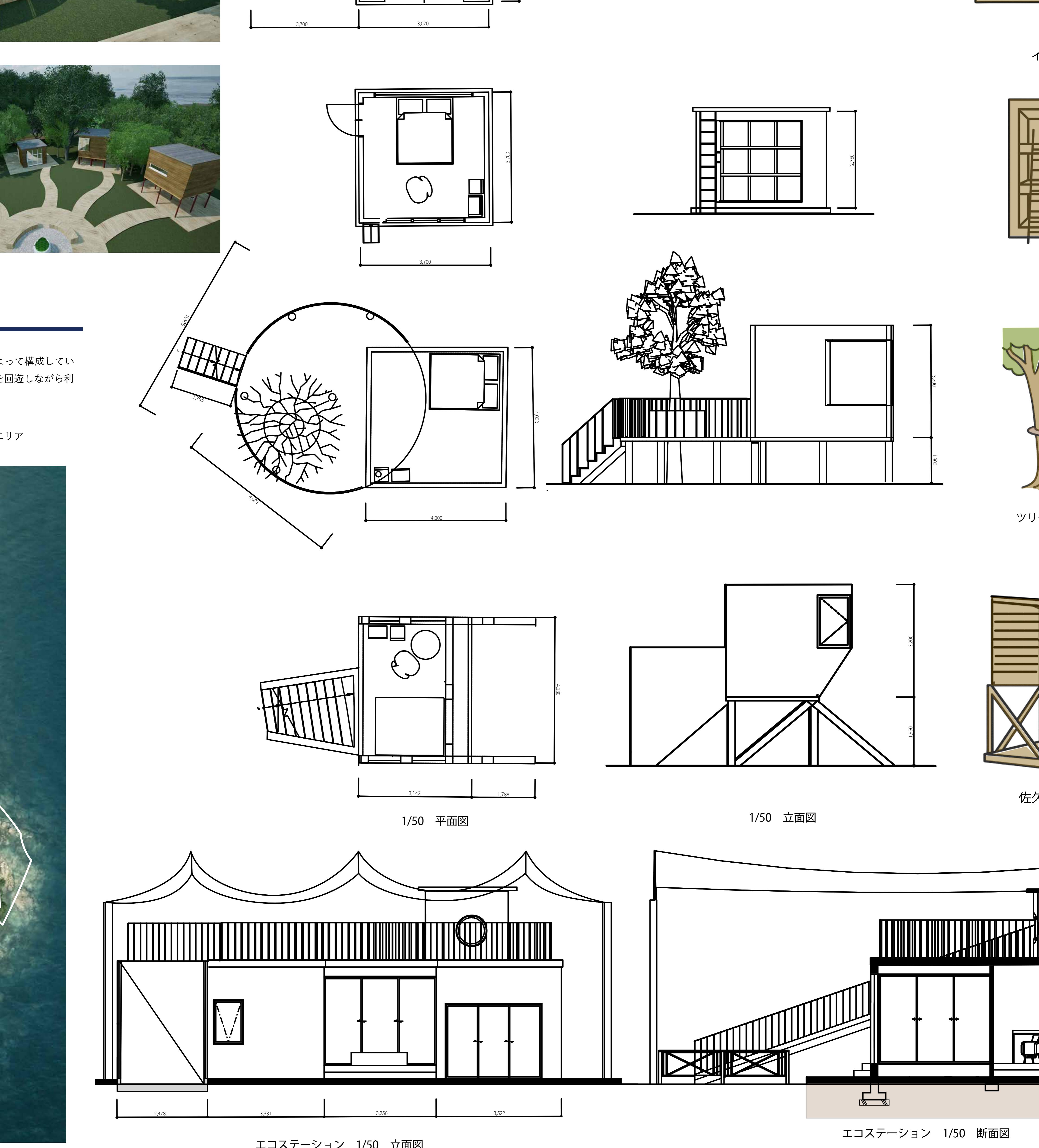
■ グランピングエリア ■ 管理棟 ■ エコステーション・菜園 ■ サウナ



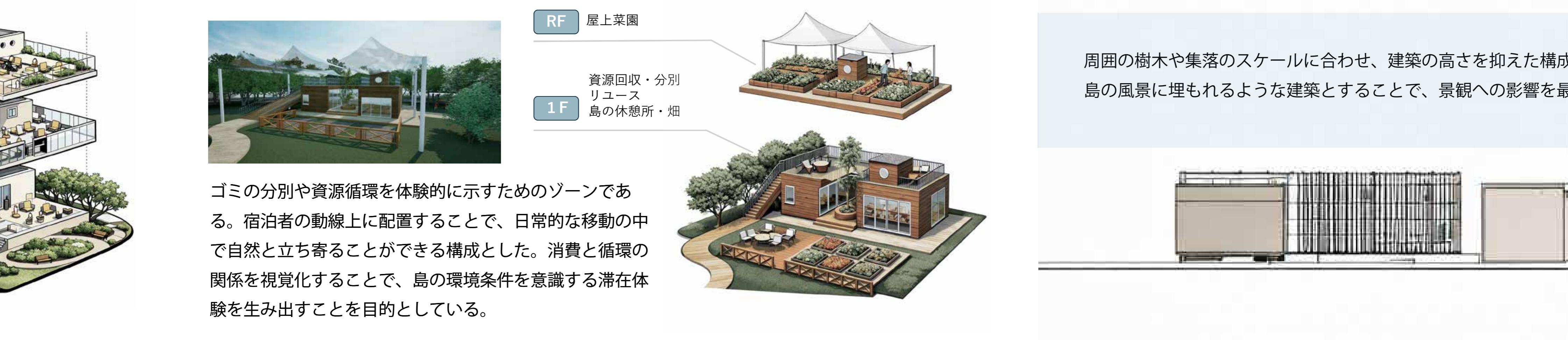
12 管理棟



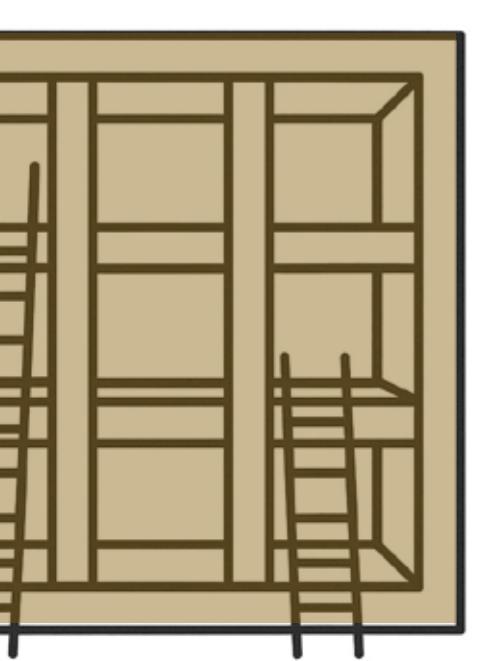
施設全体の拠点として、受付・飲食・交流といった共有機能を集約した。宿泊者が最初に立ち寄る場として配置し、島の情報や滞在のルールに触れる起点となる空間とした。また、複数のゾーンをつなぐ結節点として位置づけ、施設全体の動線を整理する役割を担っている。



13 エコステーション



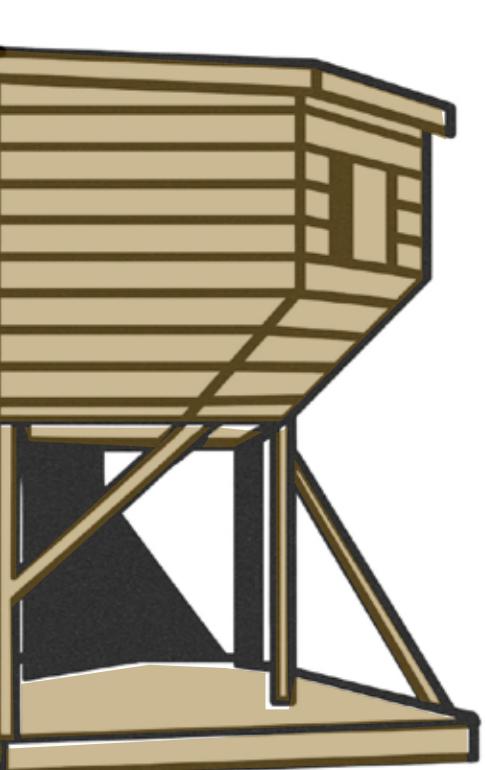
ーストハウス



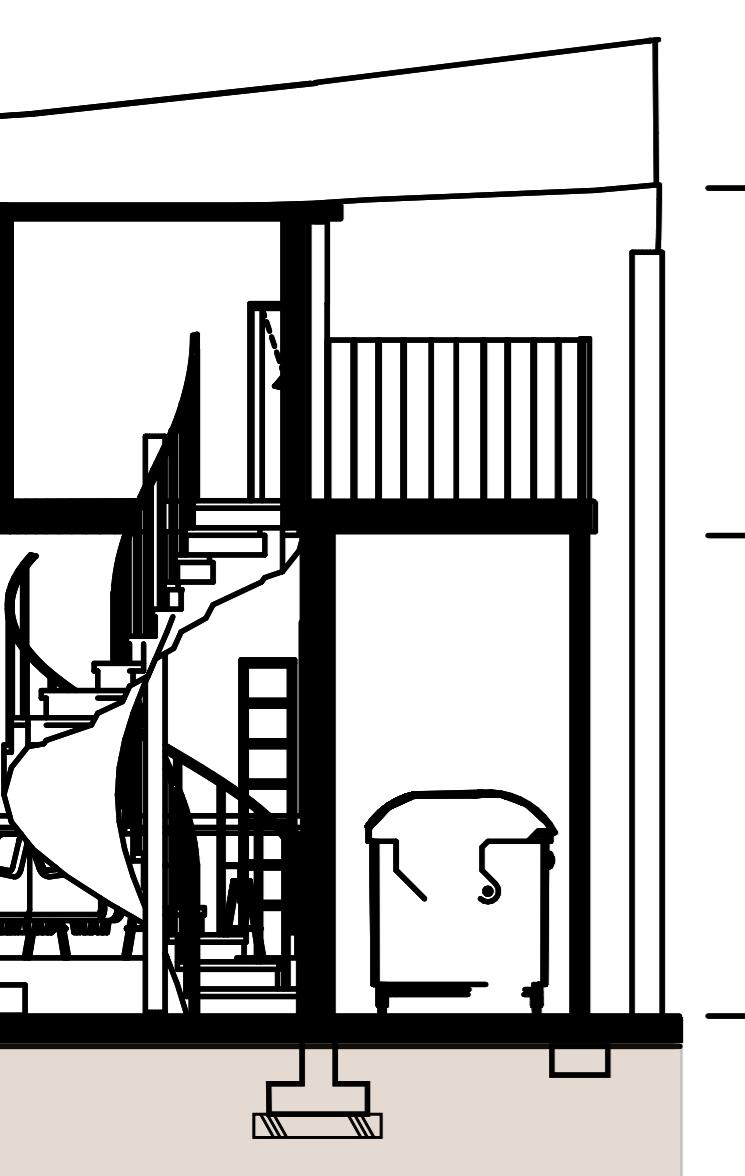
おひるねハウス



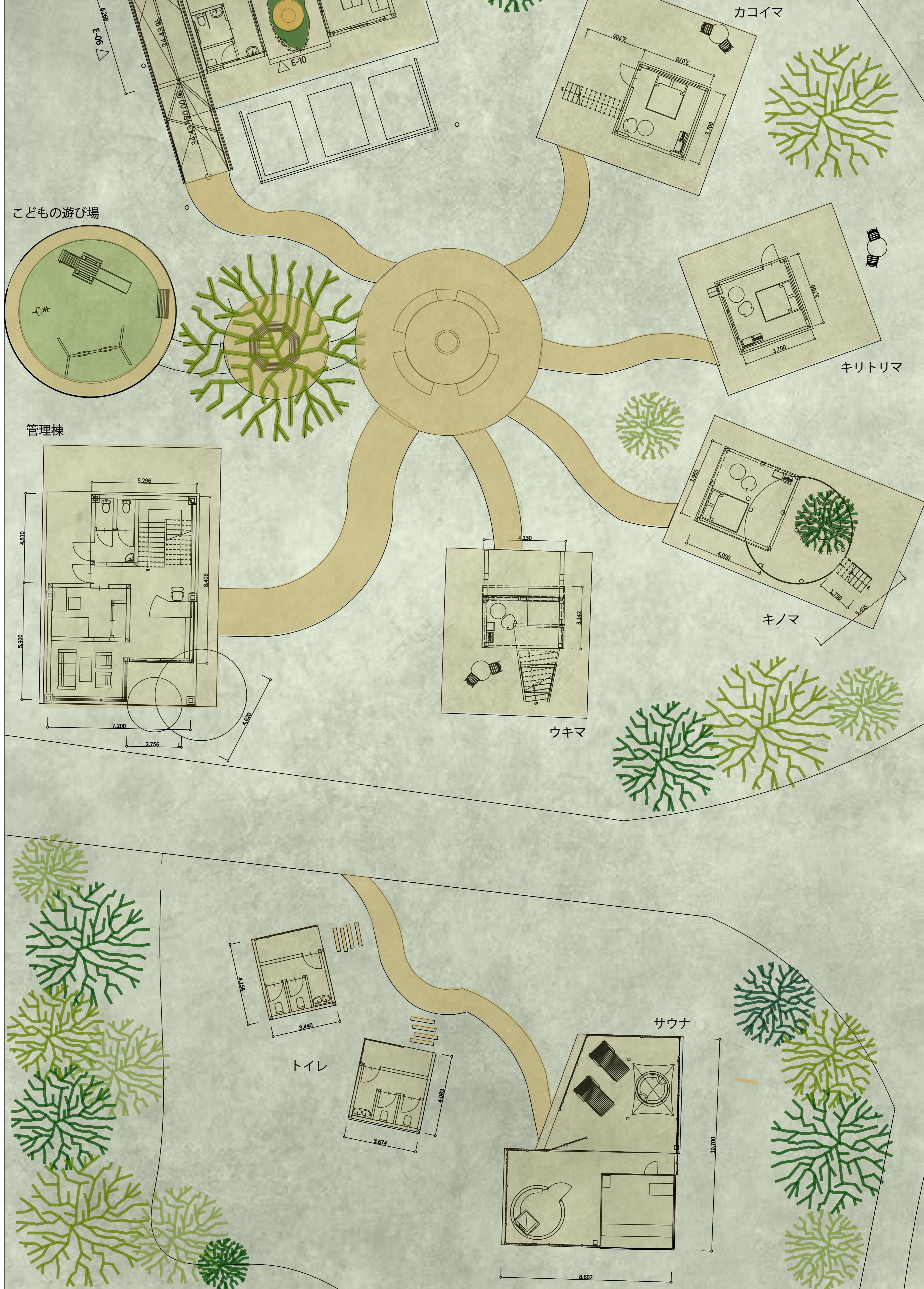
一ハウスプロジェクト



島の秘密基地アポロ



としている
小限に抑えている



1 / 100 平面図



1 / 100 立面図